

## 富岡製糸場に関する学生の理解

堀内 雅子

群馬大学教育学部家政教育講座

(2007年9月12日受理)

### **The knowledge of the students in faculty of education about Tomioka Silk Mill, the first national silk filature in Japan**

Utako HORIUCHI

Department of Home Economics, Faculty of Education, Gunma University

Maebashi, Gunma 371-8510

(Accepted September 7, 2007)

#### **Summary**

We did a questionnaire for 134 students in Faculty of Education to know the knowledge about Tomioka Silk Mill, the first silk manufacturing factory established by the Meiji government in 1872. The results are as follows.

Although all of the students learned about Tomioka Silk Mill 3 times at primary school, junior high school and high school, only 40% of the students could write that Tomioka Silk Mill contributed very much for the modernization of Japanese economy.

These results suggest that the subjects learned in the school days were inputted separately and the students are hard to be able to integrate the subjects synthetically.

#### **1 はじめに**

群馬県は絹に関わる産業である養蚕、製糸、織物業がバランスよく発達した地域で、明治・大正期には日本経済の発展に大きく貢献し注目された地域である。

現在では、繭や絹製品の輸入量の増加や農家の高齢化、糸価の低迷など、プラス要因が少ないことが影響して、全国的に蚕業は衰退・減少の一途を辿っているが、こうした中であっても群馬県の繭生産量は、'54年以降日本一を維持し、さらに'05年には全国の収繭量の45%を占めるなど、未だ、

上毛カルタの読み札「繭と生糸は日本一」に恥じない実績を示している。

これに加えて、'07年1月には、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界文化遺産として国内暫定リストへ追加され、6月にはユネスコの世界遺産委員会で暫定リスト入りが認められるなど、世界遺産認定が現実視されるようになったことも影響し、「絹」関連の問題への関心は高まり、今まで以上に「総合的学習の時間」等で取り上げられることが多くなるものと考えられる。

そこで、本研究では、「総合的な学習の時間」を担当することになるであろう教育学部の学生の富岡製糸場等に関する認知実態を把握するとともに、これら学生に基礎的情報を提供するために、群馬県における「絹」関連のデータをまとめることとした。

## 2 富岡製糸場に関する学生の知識

### 2-1 調査対象、方法及び内容

群馬大学教育学部学生を対象に、2007年4～5月の授業実施後に質問紙による調査を実施した。有効回答数は134である。調査内容は、富岡製糸場・工女に関すること及び製糸場設立による波及効果に関することとした。

### 2-2 調査結果

単数回答の質問14と自由記述方式の質問1を設定し、教員予備軍である学生が富岡製糸場についてどの程度知っているか調査した。単数回答の質問で正答した割合を図1に示す。なお、図1にまとめた質問①～⑪は、正答および「知らない」を含む5択質問とし、⑫は同じ5択質問であるが、選択肢に「知らない」を含まない質問形式とした。また、⑬は4択質問、⑭は3択質問である。な

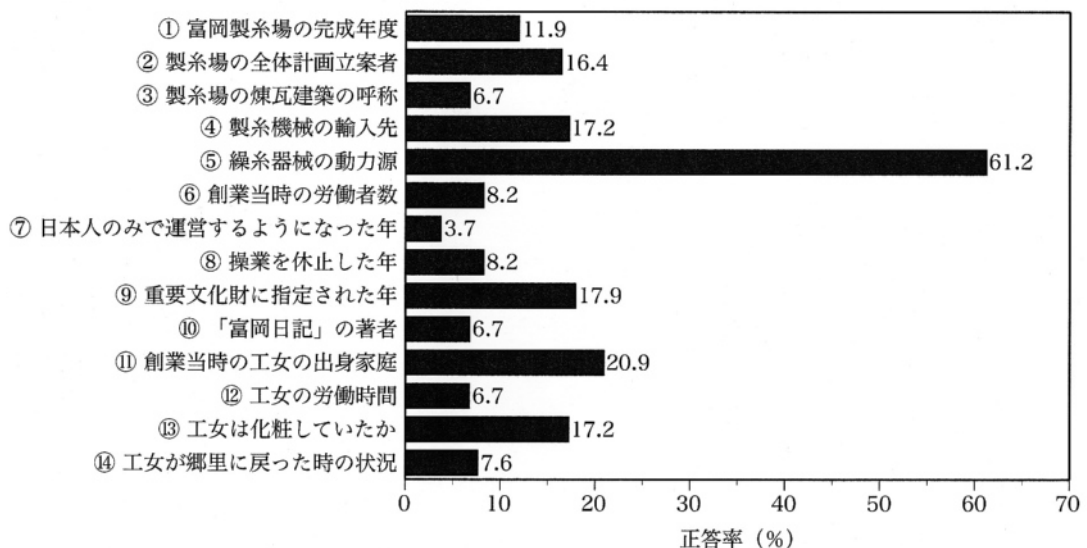


図1 富岡製糸場に関する知識

お、今回質問で選択肢に「知らない」がある 11 項目の中で「知らない」を選んだ割合が最も低いのは、質問⑩の工女の出身家庭に関するもので 15%、次いで多いのが質問⑤の 25%で、他の項目は半数程度の学生が「知らない」を選んでいった。

図で明らかのように、質問⑤の富岡製糸場の創業当時の繰糸器械の動力源については 61%が知っていたが、他の項目では正答率が 6.7~20.9%と非常に低いものであった。上述のように「知らない」を選んだ割合がほぼ半分程度で非常に高いこと、また、5 択質問のうち「知らない」を除く他の 4 つの選択肢を同じ割合で選んだと仮定し計算すると正答率は 13%程度になるはずであること等々を考えると、質問⑤以外については、「正答」であることを確信しての回答というより、むしろ偶然の結果という意味合いが含まれるとも考えられる。今回の単数回答質問が、細部に踏み込んだ内容であることを考慮しても富岡製糸場に関しては、余り知られていないことが分かった。

上述、「知らない」という回答割合が最も低かった工女の出身家庭に関する質問であるが、64%の学生は「貧しい家庭」の出身と考えており、また、工女の労働時間については 73%が「12 時間以上」と回答していた。さらに工場を辞して郷里に戻った時は「製糸場で結核を患う人が多かったので、元気な姿で戻ることができたと喜ばれた」と 69%が回答するなど、貧しい家庭の出身者が長時間労働で苦しんでいる姿を思い浮かべていた。

富岡製糸場創業当時の工女に関する記録の一つに和田英の「富岡日記」<sup>1)</sup>がある。著者の父親は信州松代の旧藩士の一人であるが、日記には他の工女の出身家庭についても記述されている。それを見ると「旧旗本の娘さん」「旧藩の方々」「皆士族の方」「……大家に育ち、大勢の人にかしづかれて居られました……」などと書かれており、これから類推しても、富岡製糸場創業当時の工女には、地方の名だたる家庭の出身者が多くいたことが分かり、学生の抱くイメージとは隔たりが大きいものであった。

労働時間については、創業当時 7 時間 45 分であったものが、徐々に長時間化し官営最終期の 1893 (明 26) 年には 10 時間 51 分になっていたという報告<sup>2)</sup>もあるが、1883 (明 16) 年頃までは、日曜日を休日とする 8 時間労働制はほぼ守られていたと考えられる。8 時間労働という労働条件は、現在では当たり前であるが、当時としては他に例をみない好条件であった。これは、1911 (明 44) 年に制定された工場法で、長時間労働を規制するために一日の労働時間を 12 時間以内、毎月の休日を 2 日以上と定めたこと、さらに、1922 (大 11) 年の工場法改正で労働時間がやっと 12 時間から 11 時間に短縮されたことなどから考えても先進的な労働条件と言えるものである。

また、労働条件の面だけでなく富岡日記の記述をみると「富岡では化粧は女子の身嗜みの一つとして許されて居りました。毎夜湯に入り、皆おしろいをつけます。つけぬ人は却って嗜みが悪いと申されます位でありました」、「国元に居ります時には金銭は皆親の手より外自分に使用いたしましたことない中に、月給一円七十五銭もとれば、何を買ってもあるように思いまして、銘々呉服屋から帯だの帯揚げなどと買ひまして、また、小間物屋などから色々需めました」とあるように、いざとなったら実家の支援があるため財布を気にせず買い物をして身ざれいにしている工女の恵まれた

様子も伺い知ることができる。

このように裕福の家庭の娘を工女として働き続けさせた原動力は何かと言うと、富岡製糸場の初代所長が書いた「繰婦勝兵隊」の5文字で象徴される評価である。明治政府の基本政策の一つである「富国強兵」の時代に兵隊にも勝ると評価されたことは、この上ないものであった。富岡日記には「繰婦勝兵隊」と書いてもらったことに対して「このような立派なる、私共身に取りましては折紙とも申すべき御書物を頂きました私共は、全世界に自分等が繰りました糸を非難する西洋人は無いとまで信じて居りました」と書かれているが、工女には良質の糸を取って、国のためになっていると言う使命感・達成感があったのである。この気持ちで郷里に戻った後も製糸技術の伝承に励んだことが、良質の生糸の量産・輸出増をもたらし、日本経済の発展につながったと考えられる。

富岡製糸場は殖産興業の推進のために明治政府が総力を結集して創設したもので極めて特殊な存在という点については、ある程度認識している学生もいたが、工女については、上述のように大多数の学生が「女工哀史」<sup>3)</sup>のイメージで捉え誤解しており、急激な日本経済の発展を理解する上で、やや問題があると考えられる。

次に、富岡製糸場は「上毛カルタ」に取り上げられていることから、群馬県出身学生と他県出身学生で知識及び見方に違いがあるか比較した。有意な差があるのは、質問⑤の繰糸器械の動力源と⑩の工女の出身家庭に関する正答割合のみであった ( $\chi^2$ -検定による有意確率が各々0.05で有意な差あり。以下、確率のみ記す)。14項目の質問の中で、僅か2項目しか有意な差がみられないということは、小学校から馴染んでいる“富岡製糸場”であっても、正確な知識として改めて伝える必要があることを意味するものである。

また、図1に示すように全体として正答率が低いため、単数回答14項目中正しい回答がいくつあるのか「正答項目数」を調べたところ、平均は全体集計では2.14項目であった。また、工女の実家について知っているか否かでみると正答項目数に違いがみられた。前述のように64%の学生は工女の実家を「娘の稼ぎを充てにするほど貧しい家庭」と思っていたが、これら学生は平均で1.61項目しか正答していず、さらに同質問で「知らない」と答えた学生(15%)も0.75項目で同様に正答項目数は少なかった。一方、ゆとりのある家庭の出身であることを知っている学生(21%)は4.71項目に正答しており、平均値の差の検定で有意な差( $P < 0.01$ )が認められた。また、工女の実家に関する項目と質問項目①、③、⑥、⑦、⑩、⑭ ( $\chi^2$ 検定、各々 $P < 0.05$ )及び②、④、⑤、⑨、⑫、⑬ (各々 $P < 0.01$ )においても有意な差が認められた。このことより、工女の実家に関して知っている学生は、富岡製糸場及びその影響などの全体像を知っている確率が高いことが分かった。

次に自由記述方式の質問「富岡製糸場ができたことで、日本あるいは群馬県がどのように変わったと思いますか」の記述内容をカテゴリー化し、複数回答項目として処理して検討を行う。頻度高く出た回答は、(a)「産業の発達、軽工業から重工業への進展」(22%)、(b)「外貨獲得、経済活性化」(19%)、(c)「養蚕が日本の産業として認知され、群馬も有名になった」(16%)に関する記述である。(a)及び(b)は高校までの教育の中で学んできた内容であるが、このいずれかに関すること

を記述した者は39.6%と半数に満たず、学びが定着していないことがわかった。他の回答としては「女性労働者が増えた」「服の自給率が高まった」等々、富岡製糸場の影響として考えるには多少疑問が残る単発の回答が多かった。富岡製糸場によって日本経済は大きく成長し、得た富によって更なる工業の発展とともに、教育や文化への影響も大きいものであったが、「教育や文化への影響」と記述した者は僅か1名のみであった。また、1884（明17）年に東海道本線より5年早く上野・前橋間に鉄道が開通し、その後も整備が進み、繭の輸送に重要な役を担った「鉄道」に関する記述についても2名だけという結果であった。なかには「工場が一つできたくらいで群馬県や日本に変化が起こるはずがない」という記述もあったが、記述しなかった34.3%の学生を含めると、富岡製糸場についてほとんど理解していない学生の割合は予想外に高いことが明らかになった。

周知のことであるが富岡製糸場は、工女たちにヨーロッパ式の器械製糸技術を習得させ、習得後はそれぞれ国元へ戻して指導者にすることを目的に設立されたものである。つまり、工女を育て、同様の器械製糸場を全国各地に普及させ、地域や日本の産業の発展にかかわらせるための模範工場なのである。

明治政府は、富岡製糸場の企画担当にフランス人 ポール・ブリューナを雇い入れている。当時は、外国人を雇用して技術移転を図るというのが近代化への近道と考えられていたため、富岡製糸場のブリューナやフランス人の工女を始めとして各所で多くの外国人が雇用されていた。こうしたお雇い外国人の人件費が最高で政府の一般会計費で約2%<sup>4)</sup>にのぼったということから、当時の技術移転への思いの強さがわかるが、まさに富岡製糸場は近代化への思いを担い、フランス人から技術を習得し、それを日本全体に広める起点となる製糸場だったのである。

したがって、官営富岡製糸場が一つできた影響は大きく、我が国全体の生糸の質も向上し輸出も増大したが、こうした重要な役を果たしてきたことが、あまり理解されていないという今回の結果は、教科書で富岡製糸場の錦絵を目にしても「模範工場」という言葉を耳にしても上毛カルタの読み札を暗記しても、それだけでは知識として定着しないということを示すものであった。

なお、学生の出身地別および工女がどのような家庭の娘だったか知っているか否か別に自由記述内容を検討したが、いずれも有意な差はみられなかった。これらのことより教師となって行う郷土教育や明治期を教える社会科の授業実践等に備え、富岡製糸場について全体像が把握できるような情報提供の仕方を工夫する必要があると考えた。

### 3 資料が示す蚕糸絹業

#### 3-1 絹および絹製品の輸出割合、収繭量の推移

桑の栽培は、土壌の透水・通気が良好で、下層土まで好气的であることが成育を良くする必要条件<sup>5)</sup>と言われているが、赤城山麓や榛名山麓等々、水田化が不可能で生産性の低い火山灰地や傾斜地などが多い群馬県は、桑園拡大を図るには最適の地域であり、養蚕業が栄える条件を備えていた。

群馬県は江戸時代以前からも養蚕が盛んであったが、飛躍的発展を遂げたのは、日米修好通商条

約の条約港として 1859 年に横浜港が開港してからのことである。新たに欧米との貿易が始まり、生糸・絹織物が輸出品の主役となったためであるが、図 2<sup>6)</sup> に示すように我が国の輸出額全体に占める生糸・絹織物の割合は、1868 (明治元年) 年時点で既に 40.2% を示しており、その後の明治・大正期も好調のまま推移した。また、生糸・絹織物に続き「その他繊維製品」の輸出も伸び始め、繊維製品全体の輸出額割合は、1924 (大 13) 年に 71.0% と最高割合を示すに至った。

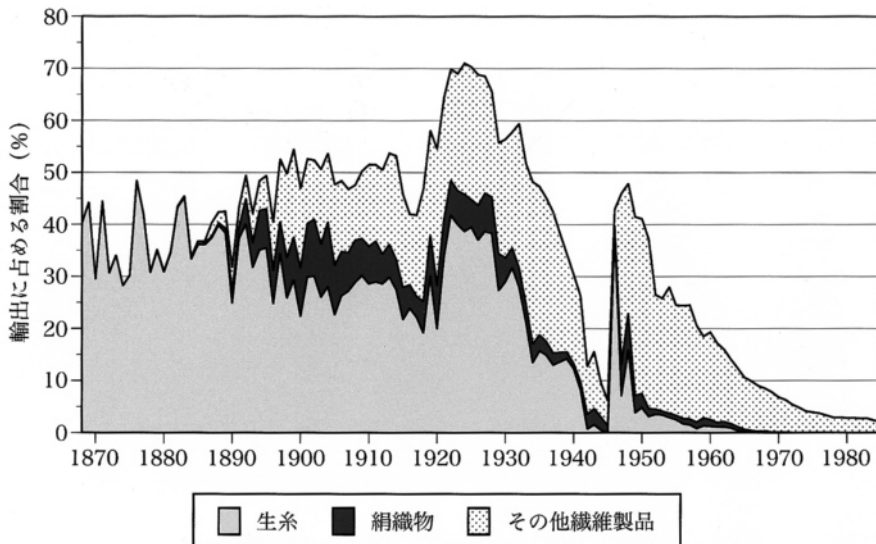


図2 生糸・絹織物及びその他繊維製品の主要商品輸出総額に占める割合

しかし、第二次世界大戦で状況は大きく変化し、繊維製品輸出割合は急減した。その後、一時の復活はあったものの減少し続け、2005 年現在では僅か 1.4%<sup>7)</sup> を占めるのみである。

この間の収繭量の推移を図 3<sup>8)</sup> に示す。明治・大正期には収繭量が急上昇し、国内消費も増えたが、第二次大戦後は全国で桑園面積が減少し、比例して収繭量も激減する。しかし、桑園の減少割合が低かった群馬県の場合は、1968 年には戦前の最盛期近くまで収繭量が回復し、対全国比は急上昇した。そして'05 年現在の生産実績は、国内生産の半量近い 44.5% を示すまでになった。

また、収繭量と生糸生産量は必ずしも比例しないため、図 4<sup>9)</sup> に生糸生産量の生産推移を示した。'05 年度、群馬県は全国の生糸生産の 29.9% を生産しており、養蚕のみならず生糸生産でも突出している県であることがわかる。

図で明らかなように日本全体の繭生産量は急減し、'06 年の収繭量は僅か 505 トンにとどまり、これで作られる「国産生糸」は、国内消費量の僅か 2%<sup>10)</sup> しか賅えない状況となり、生糸及び絹製品の大部分を輸入に頼らざるを得なくなった。

次に、絹及び絹製品の需給をみる。

繊維品の仕出地別にみた'05 年の絹織物輸入量<sup>11)</sup> は、図 5<sup>12)</sup> に示すように生産量の多い中国からの輸入が 77% で、次いでベトナムを含むアセアン、そして EU の順となる。また、繭・生糸など織

維原料の輸入も同じく中国が77%と多く、アセアン、インド・パキスタンが続いている。絹の需要は、従来の和服を含む和装関連用品に替わってスーツなどの外衣から下着に至る洋装用品、寝具類など用途に変化があるものの、'05年の絹内需(糸ベース需給)は15,735トン、世界の需要量132,902トンの約12%を占めており、日本は、依然としてシルクの内需が活発な国である。



図3 収穫量の推移

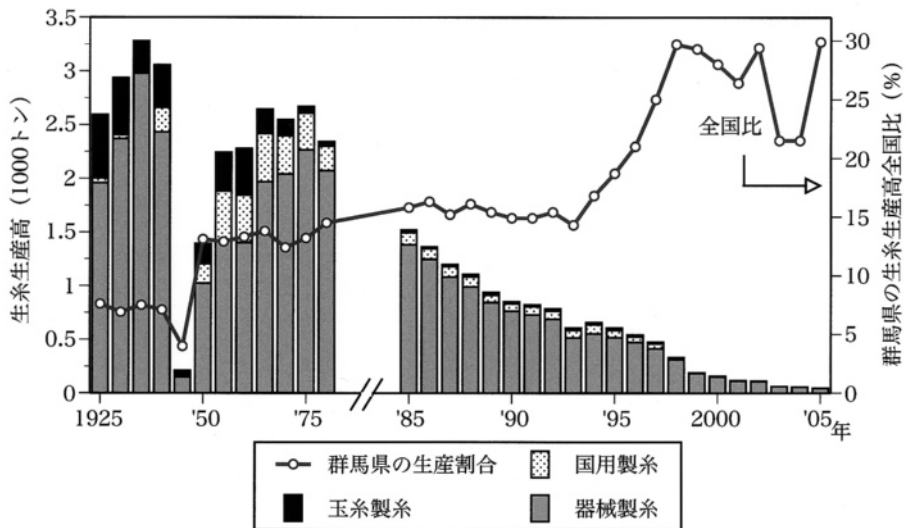


図4 群馬県における生糸生産量の推移

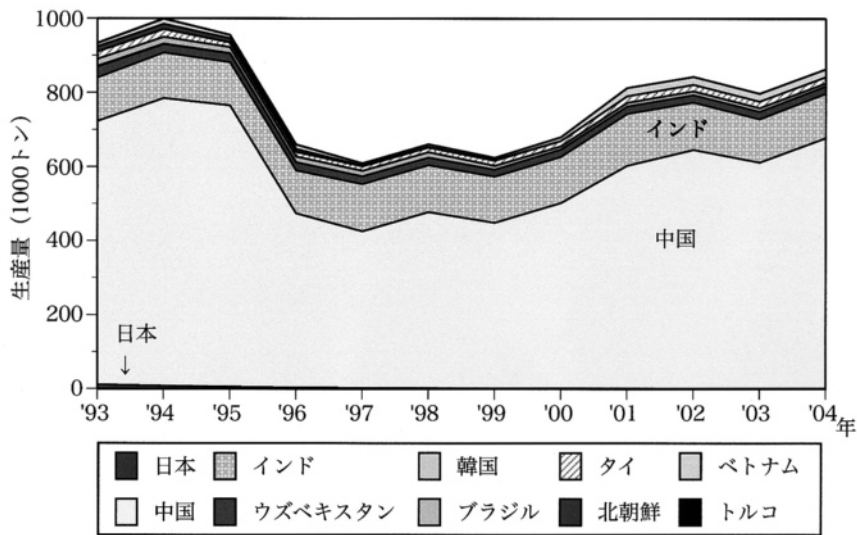


図5 世界主要国の繭生産量

### 3-2 蚕糸絹業の影響

丑木は、1877（明10）年に明治政府が作成した「全国農産表」の数値をもとに当時の群馬の地の経済状態に言及<sup>13)</sup>している。それによると普通農産物に比し、繭、生糸等々の特有農産物の生産比率が高い上野国は、全国で2番目に豊かな地域で、農産表に含まれない織物を加えればさらに豊かなことから「上野国の豊かさは蚕糸業によって実現した」という。

そこで蚕糸業への貢献度が高かった女工について、賃金の面から考えてみる。

富岡製糸場創業当時の工女は、帰郷するに際し人力車に乗り、沿道から羽織袴で正装した郷里の人たちの出迎えを受けるような別格の存在だったが、この工女ですら一等工女になっても月給は1円75銭（1873年当時）<sup>14)</sup>であった。その後、多くの製糸場で働いた「女工」の賃金も同様で、図6<sup>15)</sup>に示すように優遇されることはなかった。

こうした低賃金の背景には、国際競争に対抗するために極度の低コスト化が求められた当時の状況とともに、「飛驒の糸ひき後日調査」<sup>16)</sup>が示すように低賃金でも然程に思わずに働き続ける貧しい人々の多さがあった。例え、これら女工が、賃金に対して「普通」（30%）ないし「高い」（70%）と好評価をの良い印象をもっていようとも、貧しい女工の犠牲の上になつて日本の近代化と経済発展が達成されたことは紛れもない事実である。

製糸業の発展は、産業や経済面だけではなく、政治や文化など多方面に影響を及ぼしたが、なかでも就学率の高さとして明確にその影響をみることができる。

明治初期の近代公教育のスタートは1872（明5）年の学制公布であるが、引き続いて制定された教育令（1879公布、1880年改正、1885年再改正）などにより就学義務の強化と督励政策がとられたため、図7<sup>17)</sup>に示すように就学率は急激に上昇した。



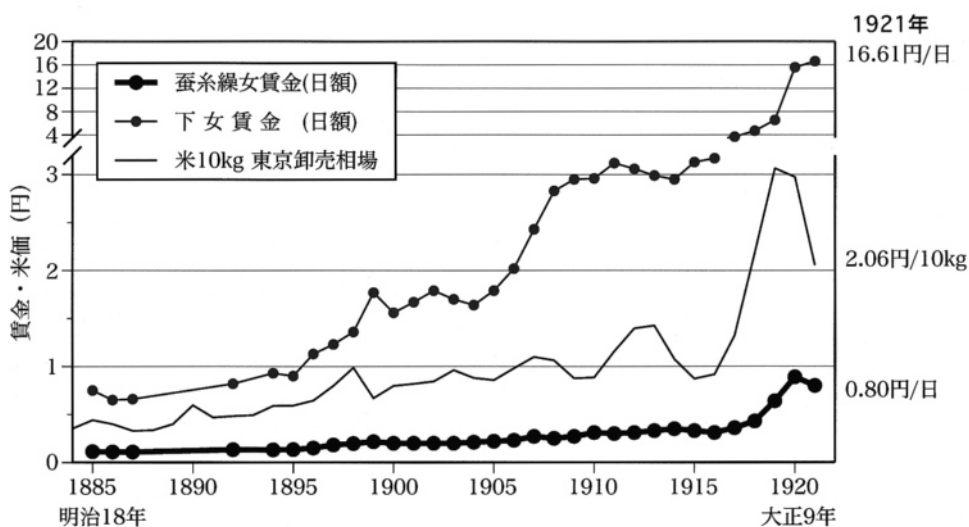


図6 蚕糸繰女・下女の平均賃金と米価の経年変化

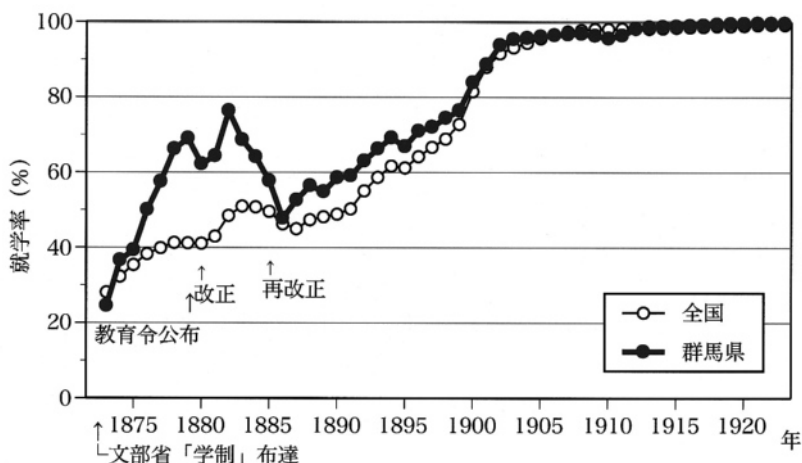


図7 学齢児童の就学率

群馬県の場合、就学率の伸びは顕著で、特に全国平均と差の大きい1882年をみると、全国平均が48.5%（男児64.6%、女児31.0%）に対し、群馬県は76.3%（男児81.3%、女児58.7%）を示しており、殊に女児の就学率の高さは全国平均の倍近くを示し顕著であった。

学制の序文<sup>18)</sup>に「……幼童の子弟は男女の別なく小学に従事せしめざるものは其父兄の越度たるべきこと」という文言がある。しかし当時は、近代学校教育は女子にとって無用であり、有害であるという考え方もある時代であり、こうした優れた近代的な教育宣言が必ずしも周知しているわけではなかった。繭を運ぶために横浜との往来・外国との交易が活発になったことで、「絹」を介して優れた技術、欧米人の合理的な考え方や近代的な思想が他地域より早く伝わることとなり、これが

群馬県における就学率、特に女児の就学率を上げ、さらには女子教育の先進県とまで言われるまでの状況を作った。このような教育の普及の成果として、後の廃娼運動・平和主義等々の近代国家に求められる考え方の基礎となる重要な部分が作られていったと推察できる。なお、1884年頃からの就学率の落ち込みは、1882年リヨン取引所での生糸取引価格大暴落の影響を受け、日本でも1882～83年にかけて生糸の国内価格が大暴落したことによるものであるが、絹への依存度が高かった群馬県への影響は大きいものであった。

このように就学率の点では、際立って高い群馬県であるが、「就学率とは対照的に出席率は全国水準以下でした。養蚕・製糸業が盛んな群馬県では、こどもたちに『おかいこ（蚕）』の手伝いをさせなければならなかったからです。」<sup>19)</sup> という記述もあることから、通学実態を調べた。

就学率と出席率の積を子どもが学校に通っている実態と考え、群馬と全国を比較した。図8<sup>20)</sup>に示すように、通学率で示す場合であっても群馬県の子どもは公教育を受ける割合が高いことが分かった。

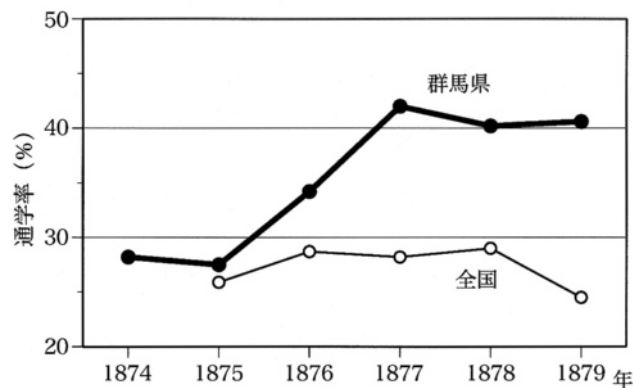


図8 学齡児童の通学率比較

### 3-3 今後の蚕糸絹業と教職に就く者がすべきこと

農林水産省は'06年5月に「今後の蚕糸業のあり方に関する検討会」（以下「検討会」と記す）を立ち上げ、養蚕業・製糸業の存続のための基本的戦略を検討している。検討会は、'05年に群馬県が行った調査をもとに養蚕農家の現状を分析し、養蚕農家の高齢化実態を報告している。それによると回答した養蚕農家543戸（該当農家総数650戸）の平均年齢は68.7歳、40歳未満の若い人は僅か2%しかいないこと、また「今後5年で養蚕をやめるかどうか」という質問に対しては、養蚕をやめると答えた農家が92戸、規模を縮小して続けると答えた農家が114戸であることなどを報告している。さらに全農からの聞き取り結果から養蚕農家の新規参入・復活の見込みについて、全国で年間1～2戸程度と予測するなど、厳しい状況を報告<sup>21)</sup>している。

このような状況に至った大きな原因は、図9<sup>22)</sup>に示すように生糸相場の暴落である。養蚕の収益性の悪化が、若い世代の就農意欲を削ぎ、さらには離農を増加させたと考えられることから、収益

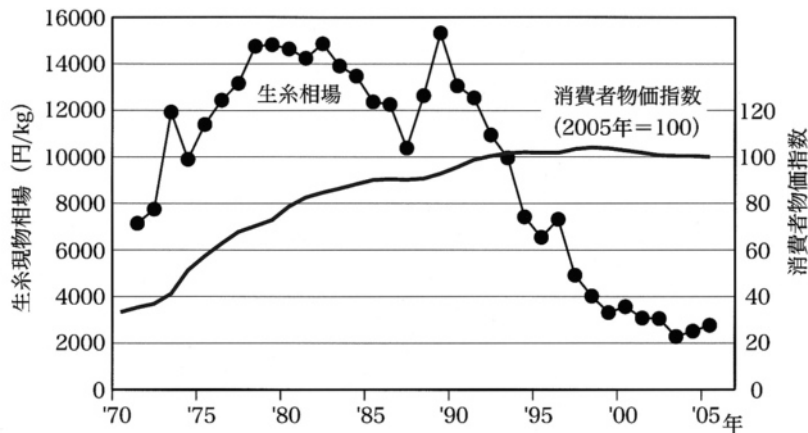


図9 生糸現物相場（横浜市場）及び消費者物価の推移

性向上を目指した様々の試みが行われるようになった。

群馬県内の動きをみると、蚕糸業への新規従事者を養成する講座の開講、休閒地だった畑に桑苗を植え付け、養蚕再開に向けた下地づくりをする桑園拡大プロジェクト<sup>23)</sup>などとともに、同一蚕種での競争から脱却して差別化を図る「ブランド化」の取組がある。

ブランド化に貢献しているのは、群馬県蚕業試験場が育成したオリジナル蚕品種である。これまでに育成された蚕品種は、'01年指定の「世紀二一」から「ぐんま200」「新小石丸」「ぐんま黄金」「新青白」「蚕太」、さらに'07年から本格的に飼育が始まった「上州絹星」に至るまでの7品種があり、これらオリジナル蚕品種の優良繭に対しては奨励金交付<sup>24)</sup>も行われた。また、2000年度からは国の品質評価措置による高品質繭の農家手取繭代2000円/kgの繭代補填措置が実現したこともあり、群馬県内での'06年度オリジナル蚕品種普及率は44.5%<sup>25)</sup>を超えるまでになった。

上述したように繭代を国が補填したり、「検討会」を立ち上げてまで蚕糸業の存続を図るのは、このまま放置すると①養蚕農家・繭生産量はさらに減少し、②製糸工場の安定稼働は困難となり、③和装・絹文化の基盤消失で「自然死」<sup>26)</sup>となると考えてのことであるという。また、蚕糸業を必要とするその他の理由<sup>27)</sup>としては、④養蚕業は就業機会の少ない中山間地において貴重な地域特産物となっていること、⑤ある程度の国内生産を維持することは、独占的輸出国を牽制する意味でも必要であること等が挙げられている。

伝統文化・着物文化の問題はさておき、繭の半分近くを生産する群馬県としては、④の理由は大きな意味をもち、さらに富岡製糸場が世界遺産候補になったこと等を考えると、改めて蚕糸業関連の問題を通して郷土について考える必要があるのではないかと考えた。つまり、過去を振り返るだけではなく、将来の養蚕農家戸数確保のためにも教育の中で取り上げて行くべきではないかと考える。

学校現場において、これら問題を取り上げる可能性が高いのは「総合的な学習の時間」であるが、

この授業は教科書もなく指導内容自体が学校に任されているという理由もあり、授業内容だけでなく広がりや深み等々は担当する教師の力量によって大きく左右されると言われている。

総合的な学習の時間の活動に関する調査報告<sup>28)</sup>によると、小学校で多く取り上げられているのは「環境」に関する内容（80%）で、次いで「地域を理解する」内容（75%）である。また、実践する上での課題としては、「評価」（70%）や「指導方法」（63%）に次いで「カリキュラム開発」（37%）が多く挙げられたという。「評価」と「指導方法」は表裏関係であるし、評価方法の転換があったこともあり両者が高率を示したこともうなずけると同報告は分析しているが、問題と思うのは「カリキュラム開発」の割合の高さである。同報告をみるかぎり「地域を理解する」を教える場合であっても何をどのように展開していけばいいのか悩んでいるというのが教師の実態と考えられる。

蚕糸業に直接的に関わりを持たない者であっても「絹」「富岡製糸場」等々に関する群馬県の実態を知る上で、ある程度の知識を有することが望まれるが、上述のように社会科、理科、家庭科、総合的な学習の時間等々でこれらに関連する問題を教えなければならない教師であれば尚更必要である。理科の授業で蚕を飼ったり、社会科や総合学習の時間で富岡製糸場について学ぶ機会が多いにも関わらず、アンケートが示すように富岡製糸場の存在意義も認識していない教育学部の学生の実態を見るにつけ、学校教育の中で「蚕」関連の問題をテーマに授業をするなら、その背景等々をも理解した上で授業展開ができるよう、断片的な知識でなく関連性をもって見る程度以上の知識を習得してほしいと願う。

#### 4 おわりに

「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産暫定リスト入りが決定したことで、今まで以上に総合的な学習の時間等で取り上げられることが多くなると考え、教師予備軍の学生の知識・認識の実態を調査するとともに、蚕糸絹業の影響を理解する助けとすべく蚕糸業関連のデータを整理した。

今回調査で大多数の学生は富岡製糸場の設立意義もその波及効果も理解していないことが明らかになった。これまで受けた教育の中で学習した内容は、個々の情報としてインプットされてはいても有機的なつながりがなかったため、学生は全体像を俯瞰できず意味するところも汲み取れなかったのではないかと考える。断片的な情報から全体像を描き、俯瞰した上で将来を見据えた判断・カリキュラム開発ができるような力を育成することが、教員養成に携わる者に求められていると考えた。

#### 引用及び参考文献等

- 1) 和田 英：「富岡日記―富岡入場略記・六工社創立記―」上毛新聞社（1973）
- 2) 今井幹夫：法政大学イノベーション・マネジメント研究センター編「富岡製糸場の歴史と文化」資料 p.10（2006）
- 3) 細井和喜蔵：「女工哀史」（第58刷）岩波文庫（2005）

- 4) 経済企画庁：「平成 12 年版 経済白書—新しい世の中が始まる—」 p.145 (2000)
- 5) 早坂 猛：桑栽培と土壌の物理性、土壌の物理性 No.9、p.6～13 (1963)
- 6) 総務庁統計局：「日本長期統計総覧第 3 巻」(1988) p.23, 24, 28, 29, 30, 31 より作図
- 7) 日本化学繊維協会：「繊維ハンドブック 2007」 P.13 (2006)
- 8) 農林水産省：「繭生産統計調査 長期累年統計」より作図
- 9) 群馬県農業局蚕糸園芸課資料より作図
- 10) 農林水産省：「今後の蚕糸業のあり方に関する検討会 最終報告書」 p.5 (2007)
- 11) 前掲「繊維ハンドブック 2007」 P.116～119 (2006)
- 12) 前掲「繊維ハンドブック 2007」及び農畜産業振興機構資料より作図
- 13) 丑木幸男：「群馬の 20 世紀—上毛新聞で見える—」上毛新聞社、p.1 (2000)
- 14) 前掲「富岡日記—富岡入場略記・六工社創立記—」 p.30
- 15) 総務庁統計局：「日本長期統計総覧第 4 巻」 p.228、231、378, 381 (1988) より作図
- 16) 山本茂実：「あゝ野麦峠—ある製糸工女哀史—」朝日新聞社 p.336～337 (1972)
- 17) 文部省「学制百年史」帝国地方行政学会 p.497 (1972) 及び群馬県教育史研究編さん委員会「群馬県教育史第五巻 (年表・統計)」群馬県教育委員会 p.458 (1976) より作成
- 18) 前掲「学制百年史」 p.11
- 19) 群馬県生涯学習センター：<http://www.manabi.pref.gunma.jp/gllc/>
- 20) 群馬県教育史研究編さん委員会：「群馬県教育史第一巻明治編 上巻」群馬県教育委員会 p.174 (1972) より作図
- 21) 農林水産省：「第 1 回今後の蚕糸業のあり方に関する検討会」議事録及び資料 3「蚕糸業をめぐる現状」 p.6 (2006)
- 22) 日本生糸問屋協会及び総務省統計局資料より作成
- 23) 上毛新聞'07. 4. 16、上毛新聞'07. 7. 2
- 24) 全国農業協同組合連合会群馬県本部：事業名「群馬ブランド繭生産奨励」  
<http://www.pref.gunma.jp/e/01/syuyoujigyoku/h15/32.htm>
- 25) 群馬県農業局蚕糸園芸課資料
- 26) 農林水産省：「第 8 回今後の蚕糸業のあり方に関する検討会」資料 3「今後の蚕糸業対策の展開方向 (案)」 p.1 (2007)
- 27) 前川泰一郎：「我が国蚕糸業の再生に向けて」独立行政法人農畜産業振興機構シルク情報 [2001.6.1号] (2001)
- 28) 大島 修、木村正臣：「総合的な学習の時間の活動と評価に関する調査研究」 p.2～5 (群馬県総合教育センター) (2002)